No. 52
2012. 8

世田谷文学館ニュース
SETAGAYA LITERARY MUSEUM NEWS

館長の作家対談
井上ユリ（料理研究家・井上ひさし氏夫人）

楡病院（『楡家の人びと』）のモデル、青山脳病院

収蔵品のご紹介
北杜夫『楡家の人びと』創作ノート

2011年度事業報告

館長の作家対談

ゲスト
井上ユリ
（料理研究家・井上ひさし氏夫人）

聞き手
菅野昭正
（世田谷文学館館長）

井上ひさし氏夫人として、米原万里氏の妹として、大きな存在感を放った二人の作家を近くで見て来られた井上ユリ氏をお招きし、菅野昭正館長がお話を伺いました。

普通では思いつかない話

館長：今日は井上ひさしさん（小説家・劇作家）のお話と、お姉さまの米原万里さん（同時通訳・エッセイスト・小説家）のお話を伺いますが、最初に井上さんのことをお話頂きたいと思います。井上ひさしさんは亡くなってからもご本がたくさん出ていますね。「月刊井上ひさし」みたいに。

井上：そこまででもないですけれど（笑）。

館長：生前から刊行する予定だったものですか？

井上：直しを入れて出すとか、書き足して出すとか、そういうものですね。『一週間』（2010、新潮社）はすでに書き上がっていましたが手を入れて出したいということで、『一分ノ一』（2011、講談社）は、最後を書き残していました。どういう終わり方にするか、時間をとって構想し直して書き上げるんだ、と言っていました。それから最近出た『言語小説集』（2012、新潮社）は、気に入っていた仕事です。あと何篇かを書き足して本にしたいと思っていたものです。

館長：『一分ノ一』は分量が多いし、随分力を入れて書いていらしたでしょうね。

井上：そうですね。連載当初はまだベルリンの壁崩壊の前でした。ところが、途中芝居の執筆が入ると、その時は半年とか1年連載を休みますでしょう？　そうこうしているうちにベルリンの壁が崩壊してしまい、その時に出すとあまりにぴったりしすぎてそれに当て込んだみたいになるのが嫌で、時間を置いてからまた書きたい、と考えていました。

館長：井上さんの国家というものに対する考え方がとてもよく出ているお仕事として、『吉里吉里人』（1981、新潮社）がありますね。それから『東京セブンローズ』（1999、文藝春秋）、そして『一分ノ一』。三部作という意図ではないでしょうけど、形としてはそう読めますね。一種の国家観といいますか。

井上：『一週間』もですね。

館長：そうですね。井上さんの、とにかく奇想天外なお話は、どうしてあんなことを考えつくんでしょうね。

井上：本当にねえ（笑）。『一分ノ一』も、本にする時に20年ぶりくらいに読んだら、可笑しくて可笑しくて。

館長：日本が4か国に占領されて、北の方がソ連に占領され、それくらいまでは凡人の僕でも思いつくけど、そこから先の色々な、もっと変てこりんなことは。

井上：地図を一分の一で作るなんて、アホなこととか。

館長：『吉里吉里人』でも、随分お調べになったでしょう？　勉強家ですよね。

井上：勉強家というより、面白くなっちゃうんでしょうね。調べる過程が一番楽しそうでした。

これから書きたかった評伝劇

館長：とにかく沢山お仕事なさっていたから、一方で「遅筆堂」と言われていらしたけれど、僕にはピンとこない。お芝居は時間がかかったのですか？

井上：それは期日との問題で、実際は大量に書いているので、速かったと思います。

館長：でしょうね、むしろ「速筆堂」。

井上ひさし『一分ノ一』、2011、講談社

菅野昭正館長

井上：そうですね。結局書き始めるのがいつになるかで、間に合うかどうか決まります。「ここから書けるぞ」というようになるまでが、どのくらいかかるか判らないので。

館長：そういう時、だいたいお宅でお仕事なさるんですか？

井上：プロットを作る時だけとかカンヅメになったりしていましたが、最近はずっと家でした。どうしてもカンヅメって人工的な空間になりますでしょう？　そうすると、作品のリアリティというか日常性がなくなって人工的になりがちだっていうのをある時言って、それからは家で書くように。

館長：そばで見ていらして、書いてらっしゃる時は気難しくなるとかはありましたか？

井上：それはないですね。ただ、創作に入ってしまうと頭がその作品の時代になっていますから、基本的に俗世間に興味がなくなるわけです。だからむしろ静かになってしまいますね。普段は野球がどうしたとか、そういうことが気になるのですが、テレビも見ないし、新聞もあまり読まなくなります。でも、どんなに忙しい時もサッカーは見ていました。これ、こまつ座や編集者たちには内緒にしていましたが。

プロットというか劇の構造、粗筋などを考える時が一番大変ですね。書き始めて、しかもある程度の量を書いて、登場人物たちが勝手に動き出すと、すごく余裕が出てきます。

館長：乗ってくる、という感じになるのかな。

井上：でも逆に、乗りすぎて1日に或る枚数以上書くと、飛ばしすぎるからと言ってセーブします。「スポーツニュース見ようか」とか。

館長：ある時期から、お芝居は実在の人物を主人公にされますね。『頭痛肩こり樋口一葉』（1984）あたりからですか。

井上：その前から、『イーハトーボの劇列車』（1980）で宮沢賢治を書いていますし、その前にも『小林一茶』（1979）を書いています。

館長：いずれも資料を沢山調べられるわけでしょう？

井上：そうです。あらゆる角度から、徹底的に。で、何か面白いことを見つけると、「ああこれで芝居になる」って。

館長：評伝劇をじつに数多く作られてますね。

井上：最後が小林多喜二（『組曲虐殺』、2009）になりましたが、齋藤茂吉を書きたがっていたんですよ。

館長：そうですか。茂吉の歌はよく読んでおられたのですか？

井上：そうですね。同じ山形出身ということもあって、ずっと気持ちが茂吉に対してあって、それで茂吉をと何度も言っていました。

館長：東北に対する思い入れっていうのかな、東北をとても愛しておられたっていう感じはありますね。いつか文学賞の選考委員会で、「これは東北人を知らない茂吉論です」と発言されて、東北人とはどういうものか、一生懸命弁じておられたことがありましたけど、茂吉というのはちょっと意外だな。でも、茂吉の話が出たときに、「東北じゃなきゃ生まれなかった歌人だ」とも言っておられましたから、我々と読み方の違ったところがあるかもしれませんね。

奥様の目からご覧になってお芝居は何が一番ですか？　特に「これこそ、ひさしさん」というのはありますか。

井上：『人間合格』（1989）です。太宰治が「赤」だった青春時代からの友人2人との話で、いわゆる「酒と薬と女」ではない太宰とその時代を書いています。太宰の作品やお話のつくり方もうめこまれていて、おかしくて、せつなくて、大好きです。私の父は16年間地下活動していたのですが、あの芝居に出て来る佐藤のモデルみたいなものなので、なおさら好きなんです。

館長：お父さまの話になりましたが、共産党の難しい時期を乗り越えられたということなんでしょうね。獄中経験もおありだったんですか。

井上：16年間逃げ続けました。

館長：いわゆる地下活動？

井上：はい。ひさしさんは、逃げているとか地下活動とかに興味があるので、そういう人物を作ってくれて。あと、『イーハトーボの劇列車』も『雪やこんこん』（1987）もすごく好きです。それから……挙げ出すとキリがなくなります。

館長：井上さんはいろんな言葉を、何かひとつ興味を持たれると、そこから色んな発想の糸をくり出される。本当に天才的で、そばでご覧になっていても、この人は天才だなあって思ったりされることはありますか。

井上：うまく例を挙げられないのですけど、同じものを見たりしても、違うところを見ているという感じはありますね。

館長：逆に、ユリさんが気づいて、井上さんが気づかないところを、こういう見方もあったのかと取りいれたりはされましたか？

井上：そういうのを見るんですね、ものを書く人たちって。自分と違う感じ方にすぐ気が付くのですね。普通の人は「ああそうか」くらいのところに、ぐっと食いつく。

館長：いつもアンテナが活きているんですね。あとはいろいろ膨らませたりして、作品の中に上手に入れたりする。そうしないと沢山のものを書けないのかも知れないですね。

井上：旅行などに行くと、この人は見ている時間より書いている時間の方が多いのではないかというくらい、メモを取ったり地図を書いたり絵を描いたりしています。書きたいものがまだ沢山あったと思います。

館長：メモのように、何か残されているものはあるのですか？

井上：こまつ座の人達と打ち合わせをする時に、今度はこういう芝居を書きたいとか、こういうテーマで書きたいとか。チェーホフのあと、シェイクスピアとモリエールを書いて、チェーホフとの三部作にしたかったようです。ヴェルディも書きたかった。

館長：ヴェルディ？　オペラもよくご覧になっていたのですか？

井上：オペラそのものはそれほど好きではありませんが、音楽とか歌とか、展開の仕方にはすごく興味があったようです。ヴェルディについては書きたいと言って、イタリア旅行の時、ヴェルディの生家を見に行きました。

館長：イタリアの劇作家、ゴルドーニの翻訳が出た頃に文学賞の選考でお会いしたとき、井上さんはゴルドーニに関する蘊蓄（うんちく）をとうとうと傾けて、なかなか止まらなくなっちゃった（笑）。面白かったんですけど翻訳の可否が問題ですから、僕が途中で止めたんです。そうしたら「ゴールドニ目がくらんで長いこと喋って申し訳ありません」って当意即妙に井上風の冗談で返されてきました。

井上：ゴルドーニってヴェネチアの人で、私はあの辺りにいたものですから、方言が少し解るんです。その話をしたら「じゃあさ、一緒にゴルドーニ翻訳しようよ」って言ったことが十何年前にあったけど、それっきりお互いに忘れていたのを、今思いだしました。

館長：いつ頃ですか、ユリさんのイタリア留学は。大学は日本ですか？

井上：そうです。小学校6年でチェコから戻りました。大学を出て短期間仕事に就いた後に調理師学校に行きました。1年間で調理師免許を取得して、そのあと2年間そこで働いて、イタリアに行きました。

館長：井上さんは、お料理されたんですか？

井上：ひさしさんも離婚の後、自分のことは自分で出来ないと、という気持ちがあって、私と再婚してからは、夜食ぐらいは作れるようにと何品か教えました。スパゲッティは自分で茹でて夜中に作っていましたよ。

館長：お仕事は大体夜ですか？

井上：夜です。何度も切り替えようとしましたけど、やっぱり夜になるんです。

井上ユリ氏

井上ユリ（いのうえ・ゆり）

1953年東京生まれ。日本共産党幹部会委員で衆議院議員を務めた父、米原昶の仕事のため、両親、姉（米原万里）とともに渡欧、小学生時代はチェコスロバキアで暮らし、在プラハ・ソビエト学校で学ぶ。高校の理科教員を経て、大阪あべの辻料理師専門学校で学び、料理研究家としてイタリア料理教室を主宰。1987年に井上ひさしと結婚。2008年に「米原万里展『ロシア語通訳から作家へ』」を企画・構成・編集。

著書に『今日から私は一流シェフ』全4巻（2005、新日本出版）、編著書に『米原万里を語る』（2009、かもがわ出版）、共著に『米原万里、そしてロシア』（2009、かまくら春秋社）、『井上ひさしの言葉を継ぐために』（岩波ブックレットNo.798、2010、岩波書店）など。

館長：でも、締切が近づくと昼間もお仕事せざるをえないってこともおありでしたか、昼も夜も仕事のペースは変わらないですか。

井上：どうだったでしょう。でも必ず眠るんです。睡眠時間はたっぷりとります。寝ないと頭が悪くなるからだめだって。どんなに相手が焦っていても、寝ないとここは書けない、という時は寝ます。「その方が早いんだ」と、言っていました。

館長：いろんなプロットを考えられる時は、小説も芝居もいつも丹念に準備されてから書いていらしたのですか？

井上：そうですね。小説の時はゆるく作りますね。小説は書きながらあっちに飛んだりこっちに飛んだりするのが楽しいので、プロットはざっくり作ります。芝居は時間や場面や、人物の制約があるので、厳密に作って最後のセリフまで読み切ってから書きます。で、どこか破綻を見つけると、書き直しですね。

館長：書き直しされることはよくあったのですか？

井上：ありましたね。途中までで書き直しとか、最初からプロットを直すとか。小説ではそういうことがありません。小説だと作者が迷ってあちこち行くのも楽しませられる。

館長：ちょっと外してもそれをどこかで嵌め込んだり、それでまた小説の世界が広がっていくこともあるでしょうから。最後までそういうやり方で貫かれたのですか？

井上：そうですね。お芝居の『闇に咲く花』（1987）は9回くらいプロットが変わっています。

館長：9回のプロットは全部残っているのですか？

井上：仙台文学館でこの春展示しました。変遷が解って、すごく面白い展示でした。

次に書く小説を読みたかった

館長：今度はお姉さまの米原万里さんのお話を伺いたいと思います。万里さんとあなたとはおいくつ違われますか？

井上：3歳というか2歳半というか。学年は2年違いです。

館長：チェコのプラハでロシア語を勉強したのは5年間くらいですか？

井上：まるまる5年です。姉は小学校3年から中学2年までの思春期に入ったところで、私よりたくさん影響を受けたと思います。

館長：ちょうど言葉を覚えるのに、そのくらいの年齢は一番いいかもしれませんね。帰国してからロシア語はどうなさったんですか？

井上：帰ってからも父はロシア語の本をちゃんと読み続けなさいと、私たちを当時代々木にあった「日ソ図書館」へ連れて行って借り方を教えてくれて、神保町の「ナウカ書店」にも連れて行ってくれました。よく図書館の本を借りて読んでいました。

館長：帰国子女だからいじめられるとかありませんでしたか。

井上：あの頃は帰国子女と言って入れてくれる大学や学校もなかった代わりに、いじめも全然感じなかったですね。

館長：万里さんの随筆の中で、どれがお薦めですか？

井上：随筆ではなくて初めて書いた小説ですね。

館長：『オリガ・モリソヴナの反語法』（2002、集英社）ですね。

井上：ええ。正直に言いますと、その前に書かれた『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』（2001、角川書店）が評判になって大宅壮一ノンフィクション賞を頂き、今でもよく売れていますが、フィクションが結構多いんです。

井上ユリ編著、共著から『米原万里を語る』2009、かもがわ出版、『米原万里、そしてロシア』2009、かまくら春秋社、岩波ブックレット『井上ひさしの言葉を継ぐために』2010、岩波書店）

館長：あなたは判るわけですね、体験を共有しておられるから。

井上：はい。そこで「こういうフィクションの作り方はないだろう」という箇所がいくつかあって、それから姉のフィクションを読むのが怖くなってしまって。「大丈夫だろうか」って。それで『オリガ・モリソヴナの反語法』も、姉には申し訳ないことをしたのですが、亡くなってから読みました。そうしたら、これがとてもよかった。丸ごとフィクションだからこそすごくリアリティがあって。これを読まずにいて悪いことしたなあと思いました。怖かったのは、身内の感覚なのでしょうね。

館長：身内の感覚というと、ひさしさんのお仕事についてはどうです？

井上：ひさしさんは知り合う前から愛読者でしたから。結婚しても身内という感覚ではなく一ファンとして楽しんで読めました。姉に対してはそれがなかなか。でもエッセイについては、それはありませんでした。特に言語論とか、面白く読んでいましたし、笑わせるものも楽しく読めました。アーニャの時を引きずってしまって悪かったなあと思います。やっと小説を1作書いて、書き方が少しわかって、次に書く小説をぜひとも読みたかったですね。

館長：井上さんは先にお読みになっていたのですか？

井上：はい。ひさしさんは読んで褒めてくれていました。

館長：惜しかったですね。万里さんも勿論もっと小説をお書きになる気持ちはお持ちだったでしょう。

井上：そうですね。いくつか構想はあったみたいです。

館長：通訳の仕事もずっと続けておられたんですか？

井上：講談社エッセイ賞（『魔女の1ダース―正義と常識に冷や水を浴びせる13章』、1996、読売新聞社）をとってから執筆の仕事がどんどん来るようになって、両立出来ないので通訳の仕事はだんだん減らして、最後の7、8年はほとんど書く方でした。

館長：いつもタイトルが面白いですね。最初の『不実な美女か貞淑な醜女か』（1994、徳間書店）から面白いですよね、逆説的になっているわけでしょう。他のタイトルでもそういう工夫がありますね。

井上：ちょっとやりすぎるんです。でも、そこが万里の個性なので。

館長：万里さんは、子供の時からいろいろ書いたりしておられましたか？

井上：作文もですが、お話が上手でした。万里の話が上手いので、先生がみんなの前に呼んで、「じゃあ米原さんお話してみて」って。万里が話をすると面白いので、私も楽しんで聞いていました。

館長：自分でお話を作るのですか。

井上：はい。大人になっても、何か可笑しいことがあると、「ねえねえ」と電話してきたり。

館長：やっぱり一種の作家魂、作家の素質みたいなものはそういうところに出ていたんですね。だいたい嘘つきじゃないと小説家にはなれませんからね（笑）。

井上：ホラ吹きってやつですね（笑）。

館長：人をだます嘘ではなく、喋っているうちにだんだん小説を書いているような気分になってきて、話が増幅していく。

井上：ひさしさんもそうですね。あったことを、もっと面白い話にしてやろうって思っちゃうんですよね。

館長：それは作家の一つの素質ですね。米原万里さんがいなくなられて、井上ユリさんが後を継いで随筆をお書きになられないですか？

井上：いやいや。姉もひさしさんも、各々タイプは違いますが先ほど言いましたように人と違う見方が出来るんです。同じ体験をしても、万里が家に帰って話すと面白い話になっちゃう。ひさしさんからも「あ、そうかこんなところがあったんだ」という事によく気付かされました。そういう人たちがものを書いて、それ以外の人はそれを楽しませて頂くのがいいです。

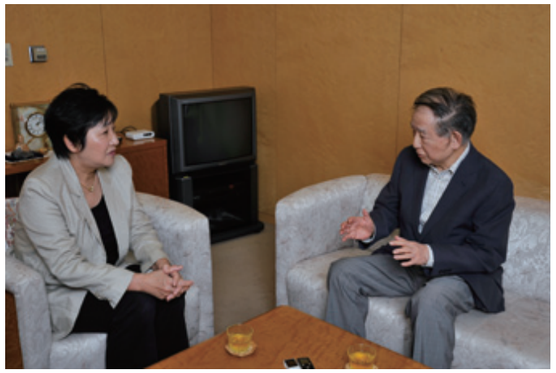
館長：その楽しんだ部分をお書きになって、井上さんもそうだし、お姉さまのもそうだし、書き残されたことを。

井上：ひさしさんは、放送作家時代から合わせると作家を50年くらいやったわけです。それだけ長く書いた作家って、自分の全部を文章にうつすことが出来るんですね。だから亡くなった後で出版される本を読む度に、ひさしさんはこの文章の中にいるって実感します。家には遺品もありますが、そういう物の中ではなく、本の中に丸ごといる。人生の大部分を作家という職業で過ごした人は、作品に全部魂が残っています。逆に、姉はそれが少し出来るようになり始めたところだったので可哀そうだったと思います。

館長：一般の読者にはそこまでなかなか伝わりませんから、ぜひそれをお書きください。書くことは自分の中から引き出す作業ですから、井上ユリさんの中に潜在しているものが引き出されるでしょう。ぜひそれを期待しています。

井上：ありがとうございます。でも、なかなか「はい」とはお返事できないですが。

（2012年6月8日、世田谷文学館館長室にて）



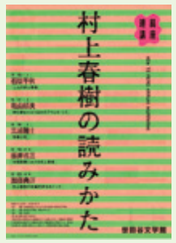
報告　連続講座

世田谷文学館では2010年より、当館館長の菅野昭正の企画、構成による連続講座を行っています。この講座では、日本文学と文化に大きな業績を残し、影響を与える作家を一人取り上げ、ゆかりの深い方々、研究者によって多方面から読み解き、考える機会とするため、開催して参りました。

2010年「知の巨匠 ― 加藤周一ウィーク」、11年「村上春樹の読みかた」、さらに本年開催した「ことばの魔術師　井上ひさし」のいずれも、各講師と参加者双方の熱意あふれる充実した催しになりました。この連続講座は終了後に講演録が刊行され、講演会に参加いただけなかった方でも本を通じて第一線で活躍中の各講師の見解、考察を辿っていただくことができます。

連続講座
「知の巨匠 ― 加藤周一ウィーク」

2010年9月18日　大江健三郎（作家）
「いま『日本文学史序説』を再読する」
2010年9月19日　姜尚中（東京大学大学院教授）
「戦争の世紀を超えて ― 加藤周一が目ざしたもの」
2010年9月23日　高階秀爾（美術評論家）
「日本美術に見る空間と時間 ― 加藤周一の文化論をめぐって」
2010年9月25日　池澤夏樹（作家）
「雑種文化と国際性」
2010年9月26日　山崎剛太郎（翻訳家・詩人）×清水徹（仏文学者）
対談「加藤周一の肖像 ― 青春から晩年まで」



連続講座
「村上春樹の読みかた」

2011年9月10日　石原千秋（日本近代文学研究、早稲田大学教育・総合科学学術院教授）
「二人の村上春樹」
2011年9月11日　亀山郁夫（ロシア文化・ロシア文学研究、東京外国語大学学長）
「神の夢または1Q84のアナムネーシス」
2011年9月18日　三浦雅士（編集者・文芸評論家・舞踏研究者）
「言葉と死」
2011年9月19日　藤井省三（中国文学研究、東京大学大学院人文社会系研究科教授）
「中国語圏における村上春樹」
2011年9月23日　加藤典洋（文芸評論家・早稲田大学国際教養学部教授）
「村上春樹の短編世界をめぐって」

連続講座
「ことばの魔術師 ― 井上ひさし」

2012年6月16日　阿刀田高（作家）
「井上ひさし ― 小説の書き手として、読み手として」
2012年6月17日　横山眞理子（映像プロデューサー・作家）
「井上ひさし ― 自立と共生の街・ボローニャに恋して」
2012年6月23日　小田島雄志（英文学者・演劇評論家）
「『藪原検校』― ことばが掘り出すもの」
2012年6月24日　鵜山仁（演出家）
「井上ひさし ― 稽古場から劇場へ」
2012年6月30日　小森陽一（東京大学教授・文芸評論家）
「遅筆堂への七本の道」
＊各講師の肩書は、開催時のもの

講演録

『知の巨匠　加藤周一』
（菅野昭正編著、大江健三郎・姜尚中・高階秀爾・池澤夏樹・海老坂武・山崎剛太郎・清水徹著、2011、岩波書店）
＊日仏会館で2010年9月17日に行われた海老坂氏講演も併せて収録

『村上春樹の読みかた』
（菅野昭正編、石原千秋・亀山郁夫・三浦雅士・藤井省三・加藤典洋著、2012、平凡社）

本年度の連続講座『ことばの魔術師―井上ひさし』の講演録も、2013年に岩波書店より刊行予定。

当館収蔵品のご紹介 45

北杜夫『楡家の人びと』創作ノート

北杜夫氏寄贈資料より

今号の表紙は東京青山に1904（明治37年）年に竣工した「青山脳病院」の写真です。大歌人・齋藤茂吉の義父である齋藤紀一が創設し、茂吉自身も医師として、後に院長として働き生活した私立の精神病院。そして、茂吉の次男で作家の北杜夫による長編小説『楡家の人びと』の主要な舞台でもあります。

今回はこの青山脳病院と、今秋の企画展でも焦点をあてる茂吉、北杜夫親子をめぐるエピソードをご紹介いたしましょう。

「これこそ小説なのだ！」

『楡家の人びと』は東京オリンピックを控えた1964（昭和39）年の春出版されました。病院経営者一族の三代にわたる繁栄と衰退の物語を、変転する時代を背景に描いた大作です。モデルは作者とその一族、齋藤家の人びとでした。

三島由紀夫が、戦後に書かれた最も重要な小説の一つとし、「小説におけるみごとな勝利である。これこそ小説なのだ！」と賞賛したこの作品は、発表当時から多くの読者を獲得してきました。半世紀後の現在も版を重ねているのは、三島が指摘したように、ある一族の年代記でありながら、近代日本の時代と運命を象徴しており、また、みずみずしいユーモアと詩情が行間からほとばしり出ているからにほかならないでしょう。

1950（昭和25）年 箱根での齋藤茂吉（1882～1953）と宗吉（のちの北杜夫1927～2011）

彼の生を受けた国は破れた。病院は焼け、息子の音沙汰はなく、娘は怪我を負い、生涯の最後の仕事と思っていた資料は失われた。わずかに山河だけが残されていた。幼少期を過ごした、懐かしい、かりそめならぬ山河が。

（『楡家の人びと 第三部』）

山形県の農村に生まれ、東京に出て、持ち前の楽天主義と破天荒な行動力により一代で壮大な病院を築く初代の楡基一郎。基一郎と同郷の出身で、秀才ぶりを認められて楡家の養子に迎えられ、長女龍子と結婚して後継者となる学究肌の楡徹吉。そして、育ちは良いが、いささか頼りない徹吉の息子、楡峻一と楡周一。

基一郎たちは東京という都市の発展と膨張に合わせるかのように、本郷、青山、郊外の世田谷松原へと病院の拠点を移していきます。彼らの歴史は、スケールの差こそあれ、故郷を離れて刻苦勉励して一家を盛り立て、やがて太平洋戦争で深い傷を負うことになる多くの日本人の姿にそのまま重ねて見ることができるかもしれません。

「おとどけくださった方には謝礼を致します」

北杜夫が『楡家の人びと』を構想したのは大学時代に遡ります。当初のタイトルは『神尾家の人々』。医学部を卒業して間もない1953年の日記（当館蔵）にも「『神尾家の人々』の中で、僕は戦争を書きたい。そのなかの一人は沖縄か南洋で悲惨な死をとげる」と記されています。

北は18歳で父、茂吉の短歌に出会ったことにより文学に目覚めました。父の厳命に逆らえず医学部に進みはしますが、文学への志は固く、将来は作家になると決めていました。このころ傾倒していたトーマス・マンの『ブッデンブロオク家の人々』を読んだことが、長編小説のアイデアにつながっていきます。

『ブッデンブロオク家の人々』は百年もつづいた一商会の三代にわたる歴史であり、没落史である。長編の魅力をしみじみと私はこの小説から教わった。

（『舞台再訪』『楡家の人びと』）

北が執筆の本格的な準備を始めたのは1961年ごろ。親類や元病院関係者からの聞き取りや、大正以降の新聞の抜書きを丹念にメモした大学ノートが3冊残されています。

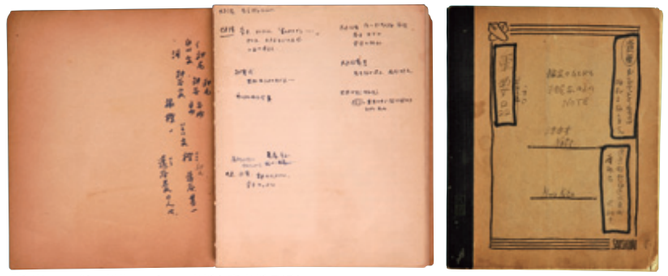
一冊目のノートは、初期の短編『星のない街路』『不倫』（共に1958年発表）の草稿ノートを活用したもの。表紙には「神尾家の人々NOTE」とあり、その上に後から書き加えられたらしい「楡家のひとびと」の文字が見えます。裏表紙の見返しには、「神谷家」「白川家」「逸谷家」「櫟家（いちい）」などの文字が記され、最終的に「楡家」に落ち着くまでのタイトル変遷の過程が見てとれます。

また、これらのノートはいずれも表紙に「重要品」と大書のうえ「貴重 おとどけ下さった方には謝礼を致します」と、住所が記されており、作者が「どくとるマンボウ」シリーズなどで見せた天性のユーモリストとしての側面もうかがわれます。

さて、北は家族をモデルに『楡家の人びと』を書きましたが、高名な歌人であった父、茂吉については文学者の側面をあえて切り捨てて二代目徹吉の人物像を造型しました。内向的で本来開業医に向かない性格ながら、二代目の役割を律儀に果たし続ける徹吉の人物像は、初代基一郎のカリスマ性をより強く読者に印象づけるための執筆上のテクニックでもあったのでしょう。しかし、北を文学に開眼させた歌人・齋藤茂吉は、あらゆる父と息子の関係の例に洩れず、北にとって、いつかは真正面から向き合わねばならない対象でもありました。

1988年、60歳の北は、『茂吉あれこれ』の連載を開始します。10年がかりで取り組むことになる茂吉評伝四部作の始まりでした。

＊ご紹介した資料は、企画展「生誕130年記念 齋藤茂吉と『楡家の人びと』」展（10月6日～12月2日、12頁参照）でご覧いただけます。



「楡家の人びと」創作ノート1の表紙と裏表紙見返し

資料受贈報告

2012年2月19日～6月15日

▼安部壽子様　新井啓子様　新井信子様　磯貝辰典様　伊藤勲様　遠藤めぐみ様　角田益信様　小埜裕二様　近藤圭一様　斎藤喜美子様　澤英彦様　鈴木紘治様　中野元一様　野口武雄様　星野明彦様　峯岸英雄様

▼青森県近代文学館　赤磐市教育委員会　市川市文学プラザ　うらわ美術館　雲柱社　絵本学会　遠藤周作文学館　大阪国際児童文学館　小田原市郷土文化館　かごしま近代文学館　神奈川文学振興会　金沢文化振興財団　鎌倉文学館　川崎市市民ミュージアム　北九州市市民文化スポーツ局　北九州市立松本清張記念館　京都工芸繊維大学美術工芸資料館　高知県立文学館　駒沢大学禅文化歴史博物館　斎藤茂吉記念館　朔北社　出版部　サントリー美術館学芸部　子規庵保存会　静岡市美術館　白百合女子大学言語・文学研究センター　新宿区地域文化部　杉並区立郷土博物館　砂町文化センター　仙台文学館　全国文学館協議会　田原市博物館　調布市武者小路実篤記念館　土屋文明記念文学館　壺井栄文学館　東京都江戸東京博物館　長崎県文化観光物産局　新美南吉記念館　日本近代文学館　日本現代詩歌文学館　日本大学芸術学部図書館　姫路文学館　平凡社編集部　北海道立文学館　前橋文学館　松山市立子規記念館　三鷹市芸術文化振興財団　明治学院大学言語文化研究所　山梨県立文学館　横浜市史資料室　立教女学院短期大学図書館

▼「あけびく」「阿部知二研究」「宇宙風」「海」「海紅」「がいこつ亭」「風花」「風」「カブリチオ」「寒雷」「椽欄」「季刊作家」「くさぐき」「九品仏川柳会」「雲の柱」「月刊トドロキ・ユキコ」「欅」「原型富山」「鴻」「心の花」「午前」「埼東文学」「山河」「山暦」「春耕」「春燈」「抒情文芸」「新現代詩」「青衣」「川柳研究」「双鷲」「大衆文化」「蠻」「多摩のあゆみ」「短歌人」「丹青」「地中海」「鶴」「野口冨士男文庫」「白」「歯車」「プチ★モンド」「麓」「文芸飯能」「緑の杖」「ゆく春」「横光利一研究」「ランブル」「りんごの木」「檸檬」の各誌ほかより資料のご寄贈、ご協力いただきました。ありがとうございました。（五十音順）

展覧会のご案内

宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展

7月21日（土）～9月17日（月・祝）

© Nibariki

大切な本が、一冊あればいい。―宮崎駿

世界中の物語を通じて少年少女たちに勇気と励まし、異文化へのあこがれを与えつづけてきた岩波少年文庫。この展覧会では、アニメーション映画監督の宮崎駿が選んだ50冊を、本人の直筆メッセージとともにご紹介します。50冊の中から、あなたの人生を豊かにする1冊が必ず見つかるはずです。

宮崎駿の直筆推薦文と映画化作品の世界

岩波少年文庫はスタジオジブリ作品の源流のひとつでもあります。今回展示する50冊の直筆推薦文は、宮崎駿が400冊をこえる岩波少年文庫を実際に手にとりながら3カ月かけてじっくりと選び、1冊1冊を読み直しながら書かれたものです。

会場では、50冊のうちスタジオジブリが映画化した「ゲド戦記」、そして『床下の小人たち』を映画化した「借りぐらしのアリエッティ」の作品世界を、ジオラマや映画の制作資料などによってご覧いただけます。

岩波少年文庫60年のあゆみ

戦後まもない1950年、世界の古典や児童文学の名作を平明で美しい日本語に移し、子どもたちに贈りたいという願いを込めて創刊された岩波少年文庫。その現代までのあゆみとともに、岩波少年文庫の翻訳者たちの仕事をあわせてご紹介します。創刊時に企画編集を手がけ、自らも多くの作品を翻訳した児童文学者・石井桃子、『星の王子さま』の翻訳で知られる仏文学者・内藤濯、『ゲド戦記』の翻訳者・清水真砂子、『ツバメ号とアマゾン号』ほかアーサー・ランサム作品の翻訳者・神宮輝夫の資料を展示します。

岩波少年文庫の挿絵原画展

物語と切りはなせない挿絵の魅力。近年出版された岩波少年文庫の表紙・挿絵原画も多数ご覧いただけます。

『小公子』
表紙画：小西英子

『ガラガラヘビの味』
表紙画：しりあがり寿

会場限定スタジオジブリ特製「ミニ本」プレゼント

会期中、当館で本展チケットをご購入のお客さま（中学生以下は、館内設置のアンケートにお答えいただいた方）先着4000名に特製「ミニ本」を1冊プレゼントします。

コレクション展 2012年度後期「文学に描かれた世田谷―世田谷の詩歌と山本健吉」

10月6日（土）～2013年4月7日（日）

世田谷には北原白秋、齋藤茂吉、萩原朔太郎、三好達治、中村汀女などの詩人・歌人たちが好んで住み、この地を舞台に数多くの作品を生み出してきました。そこには世田谷の風土や季節の移り変わりへの親しみ、それぞれの日常の中にある人間の営みが真摯に歌われています。

評論家の山本健吉も長く経堂に居を構え、古典から現代にいたるまでの詩歌を中心に、『芭蕉―その鑑賞と批評―』『柿本人麻呂』『古典と現代文学』など多くの評論を著しました。日本文学の中にある伝統的な美しさと日本人の精神文化の源流を見つめ続けたのです。しかしその評論は、分かり易い文章と文学作品に対する愛情豊かな内容であり、山本健吉は多くの読者を魅了する名随筆家でもありました。

本年度のコレクション展後期では詩歌を二つのテーマとして、世田谷で生まれた詩歌とその作家たち、詩歌をはじめ日本文学の魅力と真価を問い続けてきた山本健吉の生涯とその業績を、当館のコレクションと併せてご紹介いたします。どうぞご期待ください。

山本健吉『句歌歳時記』（春、夏、秋、冬・新年）1986、新潮社
古今の歌、俳句を季節ごとに分け、鑑賞を付してまとめた秀歌選集

宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展関連イベント

1. 子どものための読み聞かせ「お話の森」
※申込受付終了
出演：小林顕作（俳優・脚本家・演出家・「コンドルズ」脚本担当）
日時：8月9日（木）14時～15時

2. 子ども向けワークショップ「ものがたりとの出会いかた」
心に残る「フレーズ」や「挿絵」、色々なテーマで岩波少年文庫を読みながら、お気に入りの一冊を見つけます。
講師：ブックピックオーケストラ（代表：川上洋平）
日時：8月25日（土）14時～16時30分
対象：小学3年生以上
参加費：無料／事前申込みによる抽選30名
※詳細はお問い合わせください。

3. 無料アニメ上映会
9月9日（日）11時～
『注文の多い料理店』（桜映画社・エコー社 19分）
『セロひきのゴーシュ』（学研 21分）
14時～
『アルプスの少女ハイジ』（東宝東和 107分）
9月15日（土）11時～
『クマのプーさん プーさんとはちみつ』
『クマのプーさん イーヨのおたんじょうび』（ディズニー・プロ 51分）
14時～
『せむしのこうま』（モスクワ映画 58分）
＊参加費：無料／各回とも当日先着150名

1～3の会場はいずれも1階文学サロン。本展記念対談［出演：江國香織、金原瑞人］は7月22日に終了。

4. 移動文学館パネル展示
7月21日（土）～9月17日（月・祝）1階ロビー
名作文学の舞台の写真を通して、物語の楽しさや魅力を伝える「移動文学館」。『クマのプーさん』と宮沢賢治の童話の世界をご覧いただけます。

5. 大人に捧げる、ジュニアたちの直筆推薦文展
8月1日（水）～9月17日（月・祝）
夏休みの期間中、小・中・高校生が選んだ大人たちに読んでほしい本を文学館で展示する、毎年恒例の〈ジュニア堂書店〉。今年は本展にあわせて、みなさんが書いたアンケートの一部を館内に展示します。

2011年度 世田谷文学館事業報告

2011年度、企画展は、「世界中で愛されるリンドグレーンの絵本」、「和田誠展　書物と映画」、「生誕125年　萩原朔太郎展」、第31回「世田谷の書展」、「都市から郊外へ―1930年代の東京」展を開催しました。親子連れで楽しめる優れた児童文学の紹介展、第一線で活躍するデザイナーであり、絵本や著述、映画の仕事で日本中にファンの多い和田誠、日本の近代詩を革新し音楽や美術にも強い関心を寄せた萩原朔太郎という、いずれも世田谷区にゆかりの深い作家の展覧会、世田谷区が誕生した時代の芸術文化に焦点を当て、世田谷文学館・世田谷美術館の収蔵品を活用した二館共同企画の初の本格的財団連携事業である展覧会と、幅広い世代、ジャンルを対象にした企画展を実施しました。

常設展では特集テーマを設定し、収蔵品の積極的な公開と活用のみならず、企画展とも連動させた内容で、来場者の関心を深めるよう一層の充実をはかっています。

教育普及事業は、一般成人を対象とした連続講座等の事業、教育委員会との共催事業、市民活動支援事業、収蔵資料の活用を促進するライブラリー運営などを実施。子どもを対象とした事業では、「せたがや子ども文学館」等のユニークなプログラムで文化庁の助成を受け、近隣の芦花小学校や粕谷区民センターとの協働により、出張展示とワークショップを行いました。夏休み恒例の、子どもから大人への推薦図書を紹介する「ジュニア堂書店」では、区内の小中学生から被災地の子どもたちに読んでほしい本を募集し、「届けよう！　本にこめたみんなの思い」と題し、仙台文学館、いわき市立草野心平文学館でも展示しました。

一般対象では、菅野館長が企画構成をする連続講座の第2回目として「村上春樹の読みかた」を開催し、講演を収録した著作が本年度に刊行されます。

2011年度は東日本大震災とその後の節電等の影響から、利用者総数は前年を下回る結果となりました。その一方で、耐震対策の実施、収蔵品管理を新システムへ移行、公式ホームページのリニューアルなど、足元を固める作業を重点的に進めました。

耐震対策では、利用者の安全を第一に、展示ケース、館内備品の転倒落下防止策、収蔵庫の資料保護対策をそれぞれ強化し、展示ケースのガラス飛散防止フィルムの装着等、震災対策を着実に実施し、イベント時の震災対応マニュアルの点検・整備・震災訓練の実施などを計画的に行っています。

展覧会　広報物

「生誕125年　萩原朔太郎展」

「和田誠展　書物と映画」

「世界中で愛されるリンドグレーンの絵本」

常設展示　特集・萩原葉子

第31回「世田谷の書展」

「都市から郊外へ―1930年代の東京」
（世田谷美術館との共同企画）

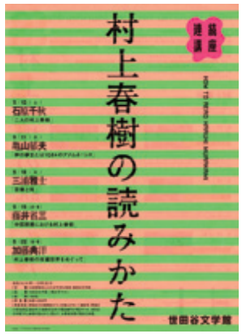
イベント　広報物

「世田谷芸術百華アートプラン
ANOTHER SIDE OF SAKUTAROU」

第31回「世田谷文学賞」

「韓国文化交流イベント」

「ことのははくぶつかん　2011」



連続講座「村上春樹の読みかた」

「第9回　大藪春彦記念ミステリー講演会」

2011年度事業一覧

1. 展覧会

	展覧会名	会期	日数	一般観覧料(円)	観覧者数(人)
常設展	(2010年度からの継続)「成瀬巳喜男特集」	4/1～4/10	9日	200円	18,378
	第1期「文学に描かれた世田谷　100年の物語」	4/16～6/26	62日		
	第2期「特集 映画を支えるデザインの仕事」	7/6～9/25	71日		
	第3期「特集 萩原葉子」	10/8～1/29	85日		
企画展	「世界中で愛されるリンドグレーンの絵本」	4/16～6/26	62日	600円	7,703
	「和田誠展　書物と映画」	7/30～9/25	50日	700円	7,255
	「生誕125年 萩原朔太郎展」	10/8～12/4	50日	700円	6,172
	第31回「世田谷の書展」	1/14～1/29	14日	無料	1,202
	「都市から郊外へ―1930年代の東京」	2/11～4/8	50日	700円	5,831
合計					46,541

2. イベント

2-1 イベント：企画展関連

実施日	内容	参加者数(人)
「世界中で愛されるリンドグレーンの絵本」関連イベント		
4/16	こども映画会「長くつ下のピッピ」	294
5/4	講演会「リンドグレーン作品の魅力について」 講師：石井登志子（翻訳家）	59
「和田誠展　書物と映画」関連イベント		
8/13	映画「怖がる人々」上映会＆トークイベント 出演：安西水丸（イラストレーター）、和田誠（イラストレーター・グラフィックデザイナー）	164
8/20	コンサート「文学とジャズ」 出演：佐山雅弘（ピアノ）、井上陽介（ベース）、道下和彦（ギター）、島田歌穂（ヴォーカル）、和田誠	169
9/24	トークショー 出演：清水ミチコ（タレント）、三谷幸喜（脚本家）、和田誠	196
「生誕125年 萩原朔太郎展」関連イベント		
10/8	記念対談「朔太郎に触れる」 出演：松浦寿輝（詩人・小説家・仏文学者）、朝吹亮二（詩人・仏文学者）	189
10/22	ANOTHER SIDE OF SAKUTAROU ① フィールドワーク「夢の地図―下北沢」 講師：吉増剛造（詩人）	31
10/30	記念鼎談「映像の詩人・朔太郎」 出演：萩原朔美（映像作家・エッセイスト）、鈴木志郎康（詩人・映像作家）、倉石信乃（詩人・写真批評）	80
11/12、11/13	ANOTHER SIDE OF SAKUTAROU ② ワークショップ「つまづくダンス・よろけることば」（「誰もいない美術館で」文学館篇） 講師：柏木陽（演劇家・NPO法人演劇百貨店代表）、上村なおか（ダンサー・振付家）	19
11/20	ANOTHER SIDE OF SAKUTAROU ③ トーク＆ライブ「ロックの国の朔太郎」 出演：町田康（作家・詩人）、林浩平（詩人・日本文学研究）、文月悠汰（詩人）、鳥居万由実（詩人）、柴田友理（詩人）	231
11/26	マンドリン＆ギターコンサート 出演：高柳未来（マンドリン奏者）、鈴木大介（ギタリスト）ほか	247
11/27	朗読会「朔太郎を読む」 出演：声を楽しむ朗読会	128
12/3	吉増剛造トーク＆上映会 出演：吉増剛造	31
第31回「世田谷の書展」関連イベント		
1/20～1/22	鑑賞講座（3回） 講師：泉原壽巌（日展会員）、池亀壽泉（読売書法会理事）、後藤俊秋（毎日書道展審査会員）	186
「都市から郊外へ―1930年代の東京」関連イベント		
2/25	記念講演会「変転する都市・東京の生活文化―1930年代から現在へ」 講師：松山巖（評論家・作家）	84
3/18	映画「マダムと女房」上映会	76
6/25	子ども文学さんぽ ③ 「長くつ下のピッピ　遠足にいく―屋外でスウェーデン料理体験？」	16
7/6～9/25、10/18～12/4	文学館たんけん隊 ① 夏休み子どもたんけんシート ② 秋の猫町たんけんシート	847
7/9	子ども文学さんぽ ④ 「高尾山　ゆかり作家・中西悟堂の足跡をたどって1」 講師：須藤正男（CONE指導者）	13
7/16	子ども文学さんぽ ⑤ 「高尾山　ゆかり作家・中西悟堂の足跡をたどって2」 講師：須藤正男	12
7/21～8/31	ジュニア堂書店「大人たちにささげる、夏休みの課題図書」「届けよう！本にこめたみんなの思い」	4,053
7/26～7/28	ことのははくぶつかん ③ ことばとびじゅつ「アートのことば」 講師：こぺんなな（アーティスト）ほか	60
8/3	「お話しの森」 出演：小林顕作（俳優・脚本家・演出家）	178
8/19	子ども文学さんぽ ⑥ 「府中郷土の森　ゆかり作家・村野四郎の足跡をたどって」（雨天により館内プログラムへ変更）	12
8/24	中高生のことのははくぶつかん ① 「チーム対抗短歌合戦」 講師：天野慶（歌人）	8
8/26	子ども美術大学発表会（共催：世田谷美術館）	72
9/10	ことのははくぶつかん ④ ことばのことば「あしたのあたしはあたらしいあたしのし」 講師：石津ちひろ（絵本作家・詩人）	15
9/17	子ども文学さんぽ ⑦ 「やってみたい＋たんけんしたい　を　かたちにしよう！」（前期）	10
9/18	ことのははくぶつかん ⑤ ことばとしぐさ「落語に挑戦」 講師：林家きく麿、林家扇（落語家）	17
10/1	ことのははくぶつかん ⑥ ことばとからだ「あたらしいことば」 講師：西井夕紀子（もぴ主宰）	13
10/15	子ども文学さんぽ ⑧ 「大山と文学1」 講師：須藤正男	6
10/29	子ども文学さんぽ ⑨ 「大山と文学2」 講師：須藤正男	7
11/5	子ども文学さんぽ ⑩ 「下北沢は猫町　萩原朔太郎の足跡をたどって」 講師：須藤正男	8
11/26	子ども文学さんぽ ⑪ 「上野？ 浅草？ 朔太郎の下町さんぽ」 講師：こぺんなな	10
12/3、12/10、12/17	ことのははくぶつかん ⑦ ことばとびじゅつ「アートのことば」 講師：ナカノヨーコ（イラストレーター）	42
12/17、1/14、2/8、2/15	「子どもどこでも文学館」	18
1/7	「はじめての百人一首」 講師：天野慶	61
1/14	子ども文学さんぽ ⑫ 「星空たんけん　ゆかり作家・野尻抱影の足跡をたどって」	8
1/28	ことのははくぶつかん ⑧ ことばのことば「ウタのたねを蒔こう」 講師：天野慶	16
2/19	中高生のことのははくぶつかん ② 「チーム対抗短歌合戦」 講師：天野慶	5
2/25	子ども文学さんぽ ⑬ 「民話・昔話さんぽ―岡本村の金の火の玉は救い神」 講師：須藤正男	8
3/3	子ども文学さんぽ ⑭ 「やってみたい＋たんけんしたい を かたちにしよう！」（後期）	8

2-3 イベント：講演会等

実施日	内容	参加者数(人)
7/1	韓国文化交流イベント ① 韓国伝統楽器レクチャーコンサート 講師：パク・ピョンオ（演奏家）	71
7/2	大藪春彦記念ミステリー講演会 講師：志水辰夫（作家）	83
7/9	韓国文化交流イベント ② 韓国カルチャー講座 講師：キム・ヘシン（学習院大学・青山学院大学講師）	72
9/10	連続講座「村上春樹の読みかた」① 「二人の村上春樹」 講師：石原千秋（日本近代文学研究）	81
9/11	連続講座「村上春樹の読みかた」② 「神の夢または1Q84のアナムネーシス」 講師：亀山郁夫（ロシア文化・ロシア文学研究）	104
9/18	連続講座「村上春樹の読みかた」③ 「言葉と死」 講師：三浦雅士（文芸評論家）	72
9/19	連続講座「村上春樹の読みかた」④ 「中国語圏における村上春樹」 講師：藤井省三（中国文学研究）	52
9/23	連続講座「村上春樹の読みかた」⑤ 「村上春樹の短編世界をめぐって」 講師：加藤典洋（文芸評論家）	108
11/3	世田谷アートフリマ in 文学館	500

2-4 イベント：世田谷文学賞関連

実施日	内容	参加者数(人)
7/10	創作のためのワンポイントアドバイス ① 川柳 講師：速川美竹（世田谷文学賞 川柳部門選考委員）	14
7/17	創作のためのワンポイントアドバイス ② 詩 講師：三田洋（世田谷文学賞 詩部門選考委員）	16
7/23	創作のためのワンポイントアドバイス ③ 俳句 講師：高橋悦男（世田谷文学賞 俳句部門選考委員）	14
7/24	創作のためのワンポイントアドバイス ④ 短歌 講師：佐佐木幸綱（世田谷文学賞 短歌部門選考委員）	31

2-5 イベント：他団体との共催事業等

実施日	内容	参加者数(人)
4/23	子ども読書の日記念事業「長野ヒデ子講演会」 共催：世田谷区教育委員会	80
6/22	芦花小学校「まちたんけん」 共催：世田谷区立芦花小学校	50
9月、2月	中学生職場体験 共催：世田谷区教育委員会	25
11/23	多摩美術大学との共同研究 「清水邦夫の劇世界を探る」	73
12/9、12/16	学校おはなしボランティア養成講座 ステップアップ講座 共催：世田谷区教育委員会	111
2/24	芦花小学校「感謝の会」 共催：世田谷区立芦花小学校	273
通年	文学館友の会との共催 文学講座、文学散歩など40回実施	1,395
通年	文学活動を中心とする区内活動団体の講座等を支援し、区民の生涯学習の要望に応えた。区民講座・シニアスクール等への企画展に関するレクチャーなどを、延べ12団体に実施した。	804

3. ライブラリー・講義室・絵本コーナー等

施設	利用者数(人)
ライブラリー	6,821
講義室	3,335
絵本コーナー	11,507

4. 移動文学館

内容	参加者数(人)
区内小中学校ほか　展示	14,855（21ヶ所）
区内小中学校　ワークショップ	258（1校）

5. 文学資料収集・保管

	点数
2012年3/31現在の収蔵品点数	93,558点
特別観覧件数（撮影点数）	35点

6. 世田谷文学賞

募集部門	詩	短歌	俳句	川柳	合計
応募者数	81	85	106	72	344
入選者数	4	4	4	4	16

7. 刊行物

	タイトル	判型／頁数	頒価(円)
世田谷文学館ニュース	第48号（館長の作家対談：荻野アンナ／この一冊：坂東真理子／当館収蔵品のご紹介：映画監督・成瀬巳喜男旧蔵資料）	A4/8	無料
	第49号（館長の作家対談：辻原登／当館収蔵品のご紹介：植田寛　草稿「映画美術総論」）	A4/12	無料
	第50号（館長の作家対談：岩橋邦枝／当館収蔵品のご紹介：萩原葉子〈父・朔太郎メモ〉ノートほか）	A4/8	無料
図録等	「和田誠展　書物と映画」	A5/160	1,200
	「生誕125年 萩原朔太郎展」	A5/112	1,200
	「都市から郊外へ―1930年代の東京」	A5/224	1,800
	「文芸せたがや」第31号	A5/96	500

8. 年間来館者数

※一部イベント参加者は含まず

100,406人

「常設展 特集 萩原葉子」

「常設展 特集 映画を支えるデザインの仕事」

「世田谷の書展」鑑賞講座の様子

イベント 活動記録

10/22「生誕125年 萩原朔太郎展」関連イベント ANOTHER SIDE OF SAKUTAROU フィールドワーク「夢の地図―下北沢」

9/10「村上春樹の読みかた」第1回「二人の村上春樹」

7/1「韓国文化交流イベント 韓国伝統楽器レクチャーコンサート」

3/17「世田谷文学賞」授賞式

9/24「和田誠展 書物と映画」関連イベント トークショー

子ども文学館 展示・ジュニア向けプログラム 活動記録

12/13・15・16 移動文学館 世田谷区立芦花小学校ワークショップ「大竹さんと行く世田谷散歩」

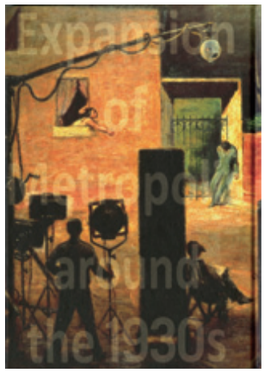
7/9・16 子ども文学さんぽ・子ども百名山シリーズ「高尾山 ゆかり作家・中西悟堂の足跡をたどって」

4/16～6/26「世界中で愛されるリンドグレーンの絵本」関連 世田谷文学館と子供たち展、あそびッピコーナー

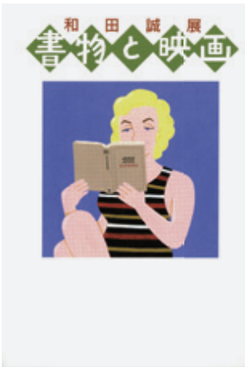
12/10～3/18 ジュニア堂書店「届けよう! 本にこめたみんなの思い」会場:いわき市立草野心平記念文学館

▶ 4/30
子ども文学さんぽ「長くつしたのピッピもの発見家になる―屋外オリエンテーリング大会」

◀ 12/3・10・17
ことのははくぶつかん ことばとびじゅつ「アートのことば」


「都市から郊外へ―1930年代の東京」

「生誕125年 萩原朔太郎展」



「和田誠展 書物と映画」

図録・刊行物

「移動文学館」―学校×地域×文学館―

「子ども文学さんぽ」―自然と芸術の野外体験プログラム―

「ことのははくぶつかん」―ことばの連続「ワークショップ」の記録2011―

「文芸せたがや」第31号

子ども向け事業 活動報告書

「和田誠展 書物と映画」

「世界中で愛されるリンドグレーンの絵本」

「都市から郊外へ―1930年代の東京」撮影:椎木静寧

「生誕125年 萩原朔太郎展」

展覧会場

2012年8～11月 世田谷文学館カレンダー

※ 9月17日(月/祝)は、満60歳以上の方は企画展・コレクション展ともに無料でご観覧いただけます。(要年齢証明書)
※ 展示替えのため、9月18日～10月5日まで2階展示室を、9月24日～ 10月5日まで1階展示室を休室します。

企画展

宮崎駿が選んだ 50冊の直筆推薦文展

7月21日(土)～9月17日(月/祝)
2階展示室
観覧料:一般500(400)円
高校・大学生300(240)円
65歳以上・障害者手帳をお持ちの方
250(200)円
中学生以下無料
※( )内は20名以上の団体料金
展覧会関連イベントは7頁をご覧ください。

©Nibariki

世田谷区制80周年 「齋藤茂吉と『楡家の人びと』」展

10月6日(土)～12月2日(日)
2階展示室
観覧料:一般700(560)円
高校・大学生500(400)円
小学・中学生250(200)円
65歳以上・障害者手帳をお持ちの方
350(280)円
※( )内は20名以上の団体料金
展覧会関連イベントについては
お問い合わせ下さい。

同時開催
「どくとるマンボウ昆虫展」
1階文学サロン 入場無料

茂吉(後列左端)と齋藤家の人びと 1928年4月

	8月	9月	10月	11月
企画展	宮崎駿が選んだ50冊の直筆推薦文展 7月21日(土)～9月17日(月/祝)		「齋藤茂吉と『楡家の人びと』」展 10月6日(土)～12月2日(日)	
コレクション展	前期「文学に描かれた世田谷－下北沢・三軒茶屋界隈」 開催中～9月23日(日)		後期「文学に描かれた世田谷－世田谷の詩歌と山本健吉」 10月6日(土)～2013年4月7日(日)	

コレクション展

前期「文学に描かれた世田谷—下北沢・三軒茶屋界隈」

～9月23日(日)

後期「文学に描かれた世田谷—世田谷の詩歌と山本健吉」

10月6日(土)～2013年4月7日(日)
1階展示室
観覧料:
一般200(160)円/高校・大学生150(120)円/小学・中学生100(80)円/
65歳以上・障害者手帳をお持ちの方100(80)円
＊中学生以下は土・祝・日及び7/21～9/17無料
※( )内は20名以上の団体料金

子ども文学館

- 8月23日 夏休み子ども文学さんぽ「等々力渓谷・昔話さんぽ」
- 9月15日 子ども百名山シリーズ「御岳山」
- 10月6日 川と文学シリーズ「奥多摩をたずねて—奥多摩渓谷さんぽ」
- 11月24日 子ども百名山シリーズ「多摩よこ山の道」
- 10月～2013年3月 ワークショップ「ことのは はくぶつかん 2012」

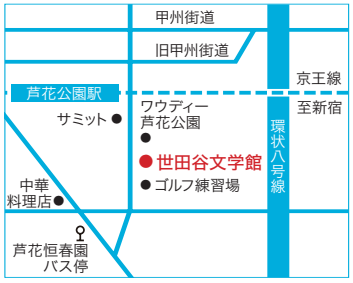
いずれも往復はがきによる事前申込、
詳細はお問合せください。
(TEL 03-5374-9117)

National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構
「子どもゆめ基金助成活動」

休 館 日:
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

開館時間:
10時～18時
(ただし展覧会入場は
17時30分まで)

交通案内
京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」
駅より京王バス(千歳
烏山駅行)利用「芦花
恒春園」下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団
世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10
TEL 03-5374-9111 FAX 03-5374-9120
ホームページ http://www.setabun.or.jp/

せたがや文化財団の催し物

■ 世田谷美術館

TEL 03-3415-6011

- すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙
  7月14日(土)～9月2日(日)

村山知義《コンストルクチオン》1925年、東京国立近代美術館蔵

- 対話する時間－世田谷美術館コレクションによる現代美術展
  9月15日(土)～11月11日(日)

ミュージアム コレクション

- 花森安治と『暮しの手帖』 こんどの暮しの手帖 じつにたのしいですよ
  6月30日(土)～9月2日(日)

花森安治《『暮しの手帖』2世紀21号(1972年12月号)表紙原画》

■ 世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館

TEL 03-5450-9581
「語らいの時間」
8月7日(火)～12月2日(日)

■ 世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー

TEL 03-3416-1202
「清川泰次のアトリエII」
8月7日(火)～12月2日(日)

■ 世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館

TEL 03-5483-3836
「宮本三郎クロニクル 1922→1974」
8月7日(火)～12月2日(日)

■ 世田谷文化生活情報センター 世田谷パブリックシアター

TEL 03-5432-1526

- 子どもとおとなのための◎読み聞かせ『お話の森』
  出演:仲村トオル 小林顕作 ROLLY
  8月4日(土)、5日(日)
  シアタートラム
- 日野皓正 presents "Jazz for Kids"
  8月11日(土)、12日(日)
  世田谷パブリックシアター
- 音楽劇『ファンファーレ』
  脚本・演出:柴幸男 音楽・演出:三浦康嗣 振付・演出:白神ももこ 出演:坂本美雨 他
  9月28日(金)～10月14日(日)
  シアタートラム

坂本美雨

- 『4 four』
  作:川村毅 演出:白井晃
  出演:高橋一生 他
  11月5日(月)～25日(日)予定
  シアタートラム

高橋一生

■ 世田谷文化生活情報センター 生活工房

TEL 03-5432-1543

- 生活工房15周年企画
  「地球に触ろう、"希望の地球"を語ろう!」
  8月3日(金)～5日(日)

- 「じわじわjiwa展」
  7月29日(日)～9月2日(日)

■ 世田谷文化生活情報センター音楽事業部

TEL 03-5432-1535

- ジョン・ケージ生誕100年記念プロジェクト
  「アルディッティ弦楽四重奏団＋野村萬斎/中川賢一」～ケージの中の日本～
  9月12日(水) 19時開演
  世田谷パブリックシアター
- 室内楽シリーズ
  「神谷百子マリンバリサイタル」
  10月7日(日)15時開演
  成城ホール

アルディッティ弦楽四重奏団

神谷百子

表紙:青山脳病院 北杜夫の代表作『楡家の人びと』の舞台である「楡病院」のモデル、青山脳病院の写真。齋藤茂吉の義父・紀一が開院し、1907年まで5年に亘って増築を重ねた大病院の偉容を伝える(写真は大正期)が、この建物は1924年12月に焼失。茂吉は精神科医となり、後年院長を継ぐ。